

顧問企業限定事務所通信

2023年7月号



阿部竜司法律事務所

Ryuji Abe Law Office

《「終わり」を思い描くことの重要性》

【はじめに】

いつも大変お世話になっております。

今回は、私の信奉する「7つの習慣」(スティーブン・R・コヴィー著)の中から、第2番目の習慣である「終わりを思い描くことから始める」についてお伝えしたいと思います。

ここで言う「終わり」とは、以下のような言葉に言い換えることができます。

- 目的地
- ゴール (目的・目標)
- 完成形
- 将来像 (ビジョン)
- 理想像
- … e t c

では、「終わりを思い描くことから始める」というのは、具体的にはどのような行動習慣をイメージしていけば良いのでしょうか。

「目的地を思い描くことから始める」

とか、

「理想像を思い描くことから始める」

というように、単純に上記の言い換え表現を当てはめてみても、まだまだわかりにくいのではないかと思います。

以下、「終わりを思い描くことから始める」という行動習慣をより具体的にイメージしていただけるように、解説していきたいと思います。

【 「終わりを思い描く」 ことの具体例 】

「終わりを思い描く」という言葉のイメージをつかんでいただくにあたっては、具体例で考えてみるのがおすすめです。

【具体例1】

「何のために(行動を)選択するのか？」を常に自分に問いかける

皆さんは、ランチに何を食べるのか、という行動選択の際に、「何のためにこのメニュー(食材)を選ぶのか？」ということをご自身に問いかけながら選ぶことはありますか？

お弁当を持参されている方は別として、そうでなければ、その時の懐具合や気分等を基に、その場その場で選ぶという方が多いのではないのでしょうか。

ですが、アスリートの方やダイエット中の方など、自分自身の健康状態や肉体的な理想像に関する「終わりを思い描いている」人は、そのような視点で食事を選ぶことはしません。

「自分が求めている理想的なコンディションを整えるためには、今のどのような食事をとることが効果的か？」

といった視点や、

「自分が望んでいる理想の体型になるためには、カロリーをどの程度にコントロールし、どのような栄養素を摂取することが効果的か？」

といった視点で食事を選んでいきます。

このように、ランチに何を食べるのか、というようなごく日常的な、なにげない行動選択の際にも、「何のためにそれを選ぶのか？」と自らに問いかけること。これはまさに、「終わりを思い描く」という行動の具体例の1つといえます。

仕事に置き換えても同じです。

例えば、いくつかのタスク（作業）を行うにあたって、それぞれのタスクについて、「何のためにそのタスクを消化する必要があるのか？」と問いかけ、考えるのです。

このように考えることで、タスクごとの重要度合いや緊急度合いを整理し、的確な優先順位をつけることができるようになります。そして、的確な優先順位付けができるようになると、必然的に、限られた時間で多くの成果を上げるという、「生産性の向上」につながっていきます。

【具体例2】

ゴール（目的・目標）を明確にする

特にビジネスの世界においては、経営層が（数値的な）目標を設定し、社員の方々はその目標の達成を求められる、という構造は非常にありふれています。

ですが、私が本稿でお伝えしたい「ゴール（目的・目標）の明確化」は、そのように、組織や上司など、自分以外の他者によって設定された目標を意識する、というような意味合いではありません。

個々人 1人1人が、自らの人生に

における目的・目標を考え、それを書き出したり、絵や写真等を用いて「見える化」したりすることにより、自分自身で常に意識できるように明確化する、という意味合いで捉えていただきたいのです。

「人生の目的・目標」などと言われてしまうと、ちょっと哲学的というか、小難しいイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが。ですが、理論的・学問的な正しさ等を考える必要は全然ありません。

どんな人生を送ることができたら幸せなのか、人生において何を得たいと思っているのか、そういったことを、ぼんやりとではなく、明確かつ具体的に考えるのです。

家、車、ブランド品等々といった、物質的に得たいと思う物ものあれば、良好な人間関係、居心地の良い職場、あるいは社会的な名声など、精神的に得たいものもあるでしょう。

いずれにしても、まずは個々人がそれぞれに、人生において「獲得したい」と思うものを明確にします。

その上で、例えば、「10年後に理想の家を買う」というように、具体的な期限を決めて、「目標」として設定するのです。

これは、経営者の方であれば、そもそも、「一旗上げたい」、「成功したい」、「経済的に豊かになりたい」といった目的をもって起業されている方が多いため、自然と習慣づいている方も少なからずいらっしゃいます。

ですが、社員さんは、セミナーや研修等を通じてこのような情報に触れ、また、実際に手を動かして考える訓練を積まなければ、意識できる方は少ないです。

もし、自社の社員さんに対して、このような、「人生における目的・目標の明確化」ということに取り組んでもらいたいと思われた場合には、そのためのセミナーや研修の時間を定期的に作ることをおすすめします。

【具体例3】

「どうなりたいのか」という理想像を思い描く

具体例①のところでも、アスリートの方やダイエット中の方は、自分が望んでいる理想の体型を意識して食事を選ぶ、というお話をしました。

このような、肉体的な理想像であるとか、あるいは、「自分はどのような人間でありたいのか」という人格的

(人間的)理想像を思い描くことも、「終わりを思い描く」ことの実例の1つといえます。

肉体的な理想像については、世の中に、モデル(お手本)となるような素晴らしい肉体の持ち主はたくさんいますので、思い描くことはそれほど難しいことではないと思います。

他方で、人格的理想像については、なんとなく「こんな人間でいたい(こんな人間になりたい)」というようなぼんやりとしたイメージはお持ちであったとしても、人に説明できるほど具体的にまとまっている方は多くないと思われます。

ですが、先ほど、肉体的理想像を具体的に思い描くことで、(ランチの選択という)日常的な行動選択が変わることをお伝えしたように、人格的理想像についても、これを具体的に思い描き、自ら定めることで、日常的な行動選択が(良い方向に)変わります。これは誰しにも当てはまることですので、断定的表現で言い切ることができます。

ご自身が目指す人格的理想像を、人に説明できるほど具体的に思い描いている方は、思い描く前に比べて、間違いなく行動選択の質が向上しま

す。

理由はいたってシンプルです。

人格的理想像が明確になっており、常に意識できる状態の方は、日常生活の様々な場面において、「ここでどのような行動を選ぶことが、自分の目指す理想像に近づくか(効果的か)」という視点で、行動を選ぶようになります。

仕事でいえば、業務中のどのような場面においても、「ここでどのような行動を選ぶことが、今期の目標達成に近づくか」と意識しているようなものです。

このような意識で仕事に向き合っている方と、そうでない方とで、どちらの方が目標達成の可能性が高いかは、言うまでもないことですよね。

【 思い描く上でのポイント 】

さて、以上のような「終わりを思い描く」の実例を踏まえつつ、次に、具体的に思い描く上でのポイントをお伝えしたいと思います。

【ポイント1】

①個人、②家庭（身近な人間関係）、
③会社（職業）の3つの観点で思い描く

ごく一部の例外を除いて、基本的に、人は、個人として誰とも交わらずに生きていくということはありません。

家庭に代表される身近で大切な人間関係があり、また、生きていく糧を得るために職業に就きます。そして、大半の方は、そのような家庭（身近な人間関係）や職業（仕事）についても、多くの時間やエネルギーを使うことになります。

そうであれば、「終わりを思い描く」にあたっては、前記の具体例を通じてお伝えした「個人としての人生の目的・目標」だけでなく、「家庭（身近な人間関係）に関する目的・目標」や、「会社（職業）における目的・目標」をそれぞれ設定していく方が、よりいっそう日常生活の様々な場面における行動選択の質を上げることができるようになる、と考えられます。

これは、北海道を代表する企業である「土屋ホーム」の創業者、故・土屋公三さんが数十年前に考案され、

土屋ホームのみならず、全国の様々な企業において取り入れられている「3KM」という人材育成プログラムにおいて提唱されている考え方です。

①個人、②家庭、③会社という、人生において大きなウエイトを占める3つの分野について、それぞれに目標を設定し、その達成に向けた計画を立て、日々の行動選択（実践）に落とし込んでいくことで、より効果的に、人生全体における幸福や豊かさを実現していくことが可能になる、ということです。

これが、「終わりを思い描く」上でのポイントの1つ目です。

【ポイント2】

①個人、②家庭、③会社の順番に思い描く

3つの分野の目標設定を考えるにあたっては、まず①個人、次に②家庭、最後に③会社、という順番で思い描くことが重要です。これが2つ目のポイントです。

3つの分野で考えるとなった場合に、最も具体的な目標を考えやすいものとして、③会社から手を付けよ

うとする方は少なくありません。

ですが、③会社は、あくまで、個人の人生を豊かにするために必要な手段（ステップ）に過ぎません。

ですから、①個人の目的・目標を考えずに、③会社の方を先に考えてしまうと、人生という大きな視点で見るときに、目的と手段が逆になってしまいます。その結果、③会社における仕事について、「やらされ感」や、「仕方なくやる感」で取り組むことになってしまう危険性があります。

また、②家庭についても、そもそも①個人としての土台がしっかりとできていなければ、家庭の充実化など画に描いた餅になってしまいます。

もっと直球な言い方をすれば、自分自身の面倒をろくに見れていない人間が、家族や大切な人の面倒をきちんと見れるわけがないでしょう、ということです。

さて、ここまで、①個人と、②家庭及び③会社との関係を見てきましたが、②家庭と③会社の順番についても、やはり意味があります。

皆さんは、家族や身近な人との人間関係でトラブルが起こってしまったときに、それはそれ、これはこれ、と頭を完全に切り替えて、仕事に

100%集中することができるでしょうか？

仕事が終わって家に帰っても、家族と険悪なムードになっている…等という状況では、まともに仕事が手につかない、という方が大半だと思います。私もそうです。

ですから、③会社でより良い成果を出そうと思ったら、先に②家庭を整え、安定させることが大切なのです。

以上、本稿では、「終わりを思い描くことから始める」という行動習慣について、その具体例やポイントをお伝えしました。

皆さんの組織における今後の社員教育等にお役立ていただけましたら幸いです。

【著作・制作・発行者】

阿部竜司法律事務所

代表弁護士 阿部 竜司

〒060-0062

札幌市中央区南 2 条西 10 丁目
1000-20

UGA札幌南 2 条ビル 4 階

TEL：011-252-7957

FAX：011-252-7958

Mail：abe@ralo.jp
